

W01

松菊凌霜譚のばしがき

近世小説の行はる、盛且饒。百餘種の新聞

紙雜誌中これと載せざるもの幾と希なる

のみならず別に冊子として刊行せるもの

其幾種なるを知らざ。文學の隆昌實に喜ぶ

べし然れども物多ければ則疵あるを免か

れざるは勢なり。余よりこれを觀れば。千種

の小説中未必だしも玼瑕なきものなしと

せど。蓋小説固より体多し。曰く社會。曰く政

事。曰く哲學。曰く教育。曰く何日何と。而して



文藻を以て行ふものあり。意匠を以て行ふものあり。其文藻に専なる者は。これを讀むに華ありと雖ども。越致の以て娛むべきなく。猶櫻花の爛熳たるも。一觀の後復餘香の追感すべきなきがごとし。意匠に専る者。これを讀むに實ありと雖ども。容姿の以て弄ぶべきなく。猶無果樹の累々たるも。一喫の後復片瓣の逐想すべきなきに似たり。是を以て小説は文藻意匠並び存し。花實共に娛むべく弄ぶべきものあるを要す。偶三

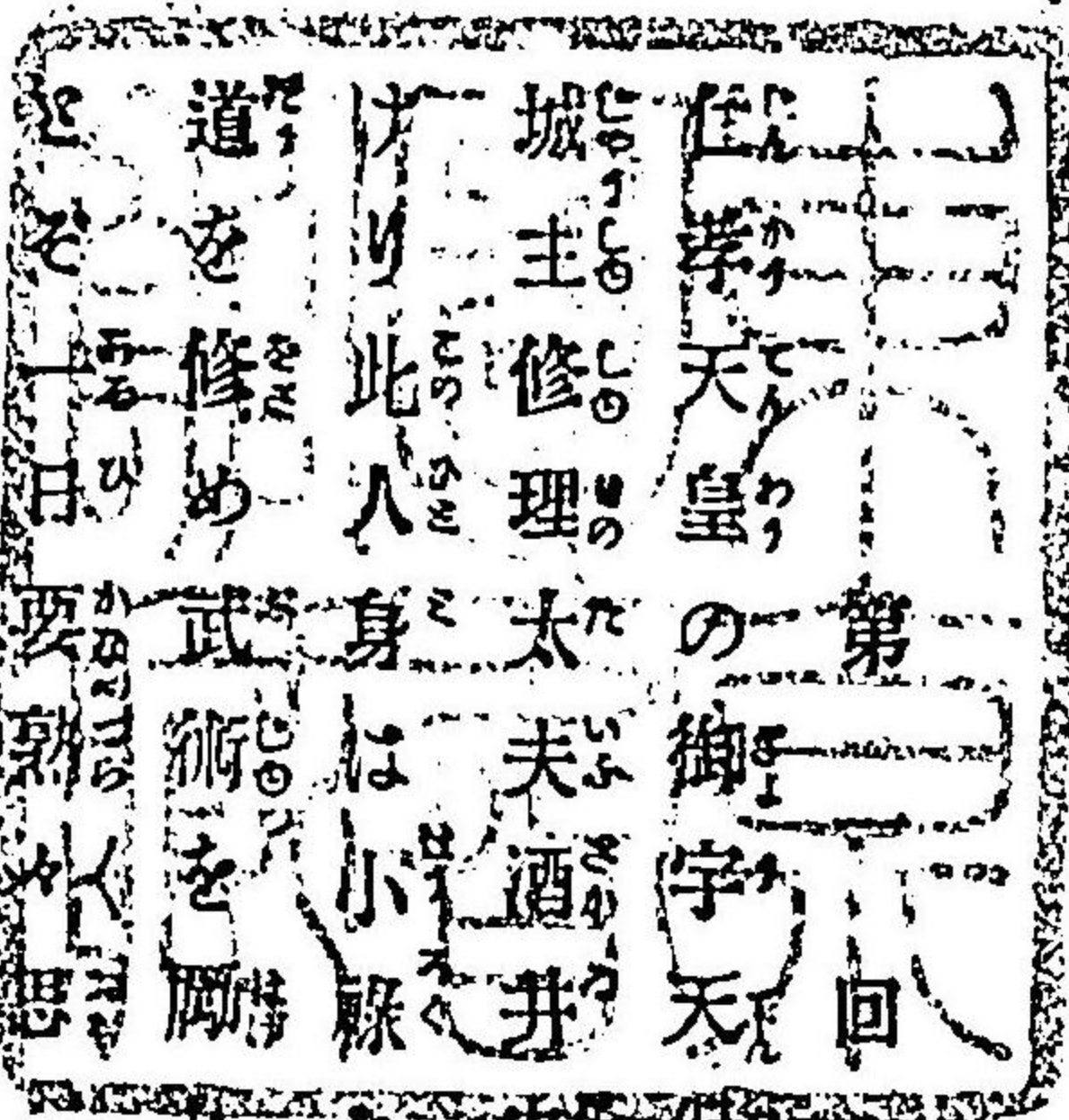
室屋主人敝廬を訪ひ。一本を出して謂て曰く。是故木戸翠香院の小傳にして。其行狀世の婦女の龜鑑となすべきものたり。而且文章瀏麗。讀むに易く解するに難からざ。因て松菊餘芳凌霜談と題し。以て世に公にせんとす。乞ふ爲に叙せよと。余案を拍て嘻して曰く。これあるかな。近時人情輕薄紙の如く。唯縹緲綺羅の愛すべきを知るのみ。故に其專行はるゝ所の小説も。中菁厭ふべきの言多きに居る。古人云ふ。文を作て世教に關せ



されば工なりと雖ども何の益あらんと善
哉言也。今此篇記する所實にして而して文
を行ふに華あり。是所謂花實共に娛むべく
娛ぶべきものたれば。其必世道人心に益
する所あるのみならん。足なきに千里を走
ると知る。是を以て遂に辭せざして一言を
贅すると斯くの如し。明治二十二年四月
洗竹居主人。浪華島街の僑居に誌す。時に櫻
花艶發して。春禽聲長閑あり。

松菊凌霜談

潜龍外史著



時ならじ其がうへ今
 の世の人には只徳川
 の有るを知りて朝
 たれば中々に此樂し
 みを樂として徒らに
 月花を玩ふべき
 世と稱ふれども盛の
 極は衰の始めなり
 と物の書にも見え
 へなく民に夫役の痛
 なく現にや遺たるを
 拾はず鎖さぬ御
 道そ一日要熟人思
 ふやう今四海泰平
 にして國に干戈の憂
 けり此人身は小祿
 なるも弱年の頃より
 志凡ならず只管文
 城主修理太夫酒井
 忠順の家臣に木崎
 要と呼べる武士あり
 任孝天皇の御宇天
 保年間のことかと
 よ若狭國遠敷郡小
 濱の

二
廷の有るを識らず是れ志ある者の深く慨き痛む所なれば
早晩世の中の變はらん時こそ至るめりされば今斯る邊隅
に區々として尸位に安じ素餐に腹を肥すは心似ず好し此
地を去りて京都に上り一は禁闕を拜みて平日の鬱憤を慰
め二つに天下の志士に交らひて大に爲す所あるべし然
なりく茲に始めて心を決め上には學問の修行と披露し
慣し故郷を立出て京都へこそは上りけり當時京都鞍馬口
新町に阿園と云へる老婆ありて幼き一人の娘を掌中の玉
と愛しみつ、日々宮中の吳服所に出入り女官方の小用を
足し些少の金を獲て其の日の烟を立て居たり斯くて要は
遙々と京都に上り聊の知音を便りて先づ我が身を寄せ扱
日毎に洛の内外を徘徊て人情風俗を察し傍ら志士をぞ求

めける或る時要鞍馬口の阿園が事を聞き彼れ宮中へ出入
るゝとあらば定めし殿上人にも知る人のあなるべし我此の
女を訪ひ心の程を語り告げて其紹介を頼まんとて日を撰
び阿園の許に至りけるに幸ひ此の日は別に所用のありて
吳服所に出でず偶々家に在りしにぞ這は仕合せよと要
は大に喜び送りに初見參の口誼を陳べ其日は只世の雑談を
語り續けて歸りしが其後は屢々音問て漸く我が身の素性
を告げ心の程をも語り聞ゆれば阿園も深く要の心を愛て
旅は兎角に物不自由なるものゆゑ衣服抔の汚たらん時は
遠慮なり持せ玉へ勤の暇に濯ひも縫ひもして參らすべ
しと世に頼もしき語言に要は其志を謝し二なき姫とぞ思
ひける年ごと紅葉はながる立田川みなどや秋のときまり

二
廷の有るを識らず是れ志ある者の深く慨き痛む所なれば
早晩世の中の變はらん時こそ至るゆりされば今斯る邊隅
に區々として尸位に安じ素餐に腹を肥すは心似ず好し此
地を去りて京都に上り一は禁闕を拜みて平日の鬱憤を慰
め二つに天下の志士に交らひて大に爲す所あるべし然
なり故郷を立出て京都へこそは上りけり當時京都鞍馬口
新町に阿園と云へる老婆ありて幼き一人の娘を掌中の玉
と愛しみつ、日々宮中の吳服所に出入り女官方の小用を
足し些少の金を獲て其の日の烟を立て居たり斯くて要は
遙々と京都に上り聊の知音を便りて先づ我が身を寄せ扱
日毎に洛の内外を徘徊て人情風俗を察し傍ら志士をぞ求

三
めける或る時鞍馬口の阿園が事を聞き彼れ宮中へ出入
るとあらば定め殿上人にも知る人のあなるべし我此の
女を訪ひ心の程を語り告げて其紹介を頼まんとて日を撰
び阿園の許に至りけるに幸ひ此の日は別に所用のありて
吳服所に出でず偶々家に在りしにぞ這は仕合せよと要
は大に喜び送に初見參の口誼を陳べ其日は只世の雑談を
語り續けて歸りしが其後は屢々音問て漸く我が身の素性
を告げ心の程をも語り聞ゆれば阿園も深く要の心を愛て
旅は兎角に物不自由なるものも衣服抹の汚たらん時は
遠慮なり持せ玉へ勤の暇に濯ひも縫ひもして参らすべ
しと世に頼もしき語言に要は其志を謝し二なき姫とぞ思
ひける年ごとに紅葉はながる立田川みなどや秋のどまり

なるらん彼の木崎要は京都に上りてより早二秋を送りけ
れば雨の夜風の日には坐に故郷の思はる、時もありしが
心弱くては叶ふまじと志を勵ましつつ偏へに世の形勢に目
を注ぎ如何にもして心ある宮人に相見えま欲しと餘所な
がら其人を探り又阿園許り往きても此事を頼み聞えける
が何時しか其年も暮れ明くれば天保十四年霞棚引春の山
景色もいと長閑なる彌生の月の初めつころ京都の人は
皆打連れて音羽山或は北野くらぶ山と自がじ、割籠吸筒
杯提けて遊ぶなれば要も今日は鞍馬の櫻見んとて出で其
歸るさ阿園の家を訪ひ譚しの序べ言ひけるやう兼て御身
に問ひ参らせんと思ひしが機會のなくて今までは黙止つ
其は餘の義にも候はず御身が抱ける其愛子の事に侍り御

四

身が年齒に比ぶれば實の子とも思はれず又孫かと思へば
他にさるべき子もお在さず抑も如何にして斯る嬰を獲玉
ひいと云ふに阿園は莞笑てさればとよ此嬰の事に就きて
は一場の物語こそ侍るなれ急がせずば春の日の徒然遣り
に聞えまつらん先づ緩りと居寄り玉へとて山茶を煎じ折
敷に盛りし菓子を進めて饗應つゝ扱語るやう抑も殷の察
し玉ふが如く此嬰は妾が子にも又孫にも侍らず實の母は
山城の愛宕郡上加茂村に住む助右衛門と呼ばれし人の娘
安と云へる女にて先づ年貧縁を求め大内に宦仕する女官
の侍女となりしが其性忠實しければ主なる人の用おもよ
くまた傍輩の氣受けもありからぬに其身も愈々勤を勵み
し程に頼ては立越ねて立身すべくぞ見えけるが茲に大内

五

六
の御例として毎年某月某日に御煤掃ひの御式あり是日は宿直の公卿殿上人も女官と打交りて甚と賑々しく御賀ども申上げ夜に入りてハ更に御酒をも賜はりぬれば一年に一回の樂しびと女房婢に至るまで寛ぎて立舞ひ遊ぶにぞ心に漏らす月影に男と語り合ふ私語の外に聞えて人に剪やされ笑ひなぶらるゝもあるぞをかかり扱僕ふれば四年以前天保十一年例の御煤掃の御賀の夜月も暈めす門簷黒きに紛れて彼方より賜もの、御酒に酔ひやうけん朗詠を口占みつゝ、來る殿上人のありけるが此方に立ちたる安女と行違ひさま反顧りて袖を引き割なく言葉を掛けられしに未だ男を知らぬ安女は唯胸のみ恟がれて顔に散らす紅葉ばもぬば玉の暗にしあれば知る人ぞなき妻折戸開けな

七
ば漏れやうぬらんと中々に心強かりしも月下の翁の導きとて墓なき夢を結しならん歎とある折しも表の方にて火事ありくと呼ぶ聲に吐嗟と許り二人は驚き互に名を問ひ後を契る隙さへなく立別れる斯くて日數經るまゝ、に安女は心地勝れず酸きもの、欲しく次第に腹の膨よかになりもて來れば今更に道は淺ましく聊ち歎けと語らん人は渚漕ぐ艇戸の小舟の綱斷えて誰とも知らぬ爺なりの實は結べどもは、木の水の梢の猿地に墜ちて言ひ寄る方のあらざれば獨り心を痛むるのみ扱あるべきにあらざれば一日妾を呼び迎へて事云々と語り聞ゆる何卒親里へ知らせぬやうに密と此難儀を救ひ給はれとの他事なき頼みに否みもせられず好きに計ひ申すべしと諾ひつ頓て病氣の由

を聞え上げ一と先づ身の暇を乞ひ妻が家へ連れ歸りける
が其翌年即ち天保十二年月満て安々と玉の如き女兒を産
み侍り然るに安女は世に爺無し兒を産み侍りて笑はれ
やせんと痛く愧らひて鬱々と樂しまねば自と肥立ちも悪
しく痛しやそれが病根にて五月餘り程過ぎて終に亡き人
の數に入りしにぞ外に詮術なきま、に辛く野邊送りを濟
ませそれより後ちば遠近の人に乳を貰ひ又たは甘酒、米の
粉汁とさまゝくに心を盡して漸く今日までは妾が手
て養育侍り是れ此の要の身の上話し俚諺に云ふ下手の長
談議さこそ倦み玉ひけめと語るを聞て要は嗟歎し語らる
、如くば誠に不愍のものなりけりされども幸ひは義媼あ
りてこそこれを救養す嗚呼御身は義あり信あり復と得難

き節婦なり就いては茲に一の願事あり這は別義にあらず
我等も國に妻あれ未だ子とては一人もなす今御身の物
語りに據れば胤は正しく宮人にて氏も素性も恥かすから
ず斯る子を子としなば末頼もしく侍るか曲げて我等に
給てんやと切に請ふて止まざれば今は否とも云ひ兼て終
に其の所望のまにく要の許へ還りける

第二一回

嘉永五年の頃京都大佛妙法院の宮に仕へ奉る一人の武士
ありけり其性質正直にして宮に事ふると忠順老實なれば
宮も二無きものと思され万彼れに御任せありし程に益々
精勤を抽でける抑も此武士を何人ぞと尋ぬるに是なん若
狭の藩士たりし木崎要なり是より先き要は阿園より彼の

幼兒を貰ひ受け一旦故郷へ立歸り妻の八重にも有り一
第を物語り名さへ幸と呼びて蝶花と愛慈ける兎角するう
ち隙往く駒の足掻き早く天保も過ぎて弘化二年となり其
歳の二月妻は妻に一人の男兒を生せ政次と名け幸と同一
く養育者が其翌年また花と云へる一女を擧げぬ是歳仁
孝天皇崩御あらせられ皇太子統仁親王御位に即かせ給ふ
此を孝明天皇と申し奉る世の中漸く形勢を變じ米利堅
の兵艦來て互市を乞ひけるが幕府これを許さず諸侯に令
して海防を嚴にせしめ諸侯も亦士氣を獎勵すされども士
皆昇平に狂て萎靡振はず尋で露英來りて通商を求む幕府
尙ほ許さず斯りける程に弘化も夢の間に過ぎ往き嘉永元
年となりたり要は兼て斯くあるべしと思ひ居たれば晝夜

寢食を忘れて海防の策を講じ士氣を振作する事を勉め
も藩論倫安を旨として要の説を賛成する者無きにぞ慷慨
遣る方なく寧ろ藩を去らんと思ひ立ちしが固より富める
身にあらねば家族を引具する事は容易き爲にあらざり
ながら此まに止まんは本意ならずと妻にも此意を知ら
せ忍びく其心構へして居たりける妻なる八重は夫に
似ぬ性質にやありけん子の無き初は深く幸を慈愛けるも
一人ならず二人まで實の子の出來て見れば日増しに幸の
疎ましくなり些少の事にも仇なく罵り辱め打擲く時さへ
あるを要は見ると忍びず小濱の邊りに住む某方へおれを
預け緩に風波を鎮めたるに愈々藩を立退く事となり終に
妻と二人の兒を携へて再び京都へ上り此回は松原下る間

の町通り下阪下る町に小やかなる家を借り夫婦微かに其
 日を送り物が足る家は方に自在なれば自づと笑ひ興じ
 て過す日多かるも貧しき家は足らぬ勝なれば何事に
 も自由ならざるより口説の絶え間なきものなるに況て内
 を修むる妻の心正しからざる時は波風の立つは是非も
 なし斯れば要は夫婦の中に目を反す事のみ多く剩さへ八
 重は女に似氣なき舉動のあるにほとく困じつ斯てあら
 んには何時吾志を成さるべきと大に慥き種々心を盡し漸
 く人の汲引に依りて妙法院の宮に仕ふる事を得たれど妻
 とは家居を異にして絶えて往通ふ事もせざりき説話二頭
 に分る茲に幸女は生れ出て程なく母を喪ひ實の父はあり
 とし聞けど名さへ顔さへ露知らず偶々木崎へ養ひ取られ

暫く要の慈愛を受けしも繼しき母の呵責に驅られ枕を安く
 眠る夜もなく心落おる時しあらねど天性至孝にして且穎
 敏なれば少くも恨む氣色なく益々心を切めて要夫婦に事
 ふる程に遠近にても其孝其敏を稱へぬはなしされども母
 の折檻轉募れば要も今は已むを得ず引分けて扱は某方へ
 預けしなるが此某も慈悲心なく母に勝りて虐げ使ふに十
 歳にも足らぬ乙女子の此艱難に苦しめらるゝ其怒なさは
 筆にも舌にも盡し難かり讀む者宜しく推しねかゝ時に嘉
 永五年幸は十二歳となりけるが此年月明暮に唯養親二人
 の事のみ懐かしく今は何地に如何してお在すやらんと鳥
 の音聞かぬ日はあれど親を思はぬ日こそなき孝子が愛慕
 そ痛しき去る程に幸女は或る日圖らずも要が京都大佛の

邊りに居る由を聞きかば今は中々に思ひ絶えで某の家
 を迷ひ出でしが忽ち追手に押へられ其後は嚴しく閉籠め
 られて外に出る事を許されぬに愈々歎き悲しみつ空飛ぶ
 鳥を眺めては翼欲しやと思ふめり斯くて日數經るまゝに
 稍々締りの怠りければ其隙を窺ひ己が貯へ持ちし十五文
 の錢を懐に宵の間に忍び出で街道より走りたらんには
 又もや追手に支へらるべいと道なき處を辿りつゝ木の根
 巖の峽に休ひつ臥しつ辛くして京都へ上り着き要の家を
 尋ね當てしは是れ同き歳九月廿日の夜なりしとなん抑々
 平安城即ち京都の興基ハ桓武天皇の延暦十二年正月甲午
 の日詔ありて大納言藤小黑麿左大辨古佐美等に山背國の
 勝地を視せしめ給ふ二臣等乃ち此彼の郡縣を經回りに奏

問すらく當邦宇多邑は地勢郁々として四神相應し有徳無
 疆の皇州なり速に新都を開き帝城を營ませ給ハ萬代不
 易の都なりとぞ申ける是に因て同き年の二月辛亥の日參
 議治部卿一志濃王を加茂大神に遣はし遷都の由を告げ給
 ひ同き三月巳卯の日天皇葛野に行幸せさせられ新都の地
 理を窺覽あらせ給ひ五位已上及び諸司主典をして役夫を
 進め宮城を造營し九重を開き四方の洛域には墮を掘らせ
 嚴たるを興し絶えたるを繼ぎ鴻業を潤色し給ふ其翌十三
 年十一月に詔ありて此國は山河襟帯し自然と城となる
 故に山背の文字を山城と改め給ひ都を平安の京とぞ號け
 られけるされば是より御裳濯川の流れたえせぬまで京都
 とは定め給ひけるとなん贅言ハさて置きつ此の京都三木

樹中ノ町に焼杉の板塀を洒落に構へ見越の松の色翠りな
 るが外の方に一枚垂れ出て江市屋格子とか云へる格子の
 清けきに履脱ぎの石さへ洗へるが如く見ゆるぞ也か又
 軒には己が紋所と土地神の名を記したる灯籠を吊し門の
 上には竹亭流となん呼ぶ文字して瀧清と書ける名標を掲
 げたる甚と風雅なる家ありけり主人は小もるきの五十路
 を二つ三つ越したる男にて名を瀧中清五郎と呼び三味線
 と長歌と云ふ俚歌の師をして世を送るものなりまた其娘
 に幾松とて年は廿歳を越えたらんか容姿の麗やかなれば
 未だ花の色は尙ほうつりやらす香ひ飄る、ばかりなるに
 弱輩は心を惱しつ、空だのめにも出入るものぞ多かりけ
 る其中に或る宮家の御内人に難波越後守と云へる風流漢

のありて繁々幾松の許に訪ひ來つ餘所ながら心の程を送
 くれれば彼方も憎からずやありけん何時しかいはけなき仲
 となり水漏さじと契りける此が爲め難波も數の黄金を費
 し今は稍貧しき身となりしま、其事を幾松に語り聞え夷
 川通り富小路西へ入る町に寓の宿を求めて詫しき月日を
 送るを見て女も我故と思へば愈捨難く終に父清五郎に乞
 ひて難波の方へ嫁き其身は習ひ覚え舞の三手味線を遠
 近の娘子に教へて活計の助けとなり夫越後は此頃流行る
 桐の箱を拵へ鬻きて夫婦諸共に微けき烟りを立て居たり
 恁りし程に或る日夕間暮れ幾松は教へ兒を歸し遣り夕饌
 の茶を洲さんと火鉢の火を團扇もて扇ぎつ、夫の斯く零
 落しも皆我からと思へばいと、罪の深かりさるにても世

に成り出づる便もがなと行末越方の事ども思ひ續けて居
たる處へ外の方にて一寸物を尋ね侍りたり長歌の師をせ
らるゝ幾松ぬいと此方にやと云ふに唯と應へて立出づ
れば容貌の賤しからぬ一人の武士が其娘にやあらん十二
三の女子を携へ居るにぞ幾松は禮正しく頭を下げ問はせ
玉ふ幾松は妾に侍りと云ふを聞き扱は家に在せいかと彼
の武士は喜ばしげに然らば免されよかして坐に通り
先づ形の鮮儀を陳べやを膝を押し進めて云ふやう我等
は大佛妙法院の宮に仕ふる木崎要と申す者にて此なるは
娘幸と呼び今年十二歳になる者に侍り斯く初見參に打附
に物申さんは唇薄しと思さんが言はでは事由の知れざる
ゆゑ一通り語り聞えなんとて頓て幸を阿園より貰ひし事

若狭へ預け置きし事若狭より一人り落延びて來りし事又
我と妻との事杯審に告げ扱我娘を我口から響むるは傍は
ら痛き筋なるが生得ての孝行ものにて我等と妻との仲ら
ひ悪しきを痛く慨き左様右様父母の心を和げつ自ら仲に
立入りて夫婦の契を昔日に返し又弟妹を慈しみつ成人も
及ばぬ老實しさを妻なる八重は善ともせず愈々益々悪む
なるを見るに得堪へず候へども然ばとて他人に遣らんは
尙更心に繋りもすれば如何はせんと案ずる折しも御身が
許にて養女を欲しと探し居玉ふ由を聞き能々糺せば御身
夫婦は世に情ある人との事に推して此まで参りつれあは
れ我等が心を察し此子不愍と思しなば今日より此方へ引
取りて子ども妹とも見玉ひて養ひ得させ給はらば其幸何

か如くものあらんと思ひ入ての頼を聞き幾松は頼に諾ひ
先づ夫越後に始終を聞おれば越後も收て異存なくさる方
様の子とあらば何條苦しかるべきとて快く領承せしに要
は大に安堵なり尙ほ前の物語りの足らぬ處を話し續き杯
して其夜より幸を幾松方へ預け、る

第三回

さる程に幾松は其心やさしきものなれば幸女の不幸を憫
み勦り我覺え一技は三味線舞の手琴笛太鼓は申すに及ば
ず香茶事活花の事までも教ふれば天性敏捷の幸女は其思
をかりこみつ、晝夜懈怠なく物學ぶに未だ幾程もなく上
達して今は幾松も中々に及び難くぞ見えにける難波も彼
が一を聞きて十を知るの才あるを感じ未頼もしく思ひ居

たるが奈何せん世は漸く落かたになり營業の道も日毎に
衰へ僅か三人の口を餉ふすら覺束なくて益々迫る活計に
夫婦は只歎息を吐くのみと詮術なかりけり爰に難波
と同じ間に月波樓と云ふ料理屋のあり家名は吉田屋と呼
び主人は義氣ある男にてありければ難波が事を聞き深く
痛まじき事に思ひ一日自ら音問て云ふは此ごろは稼の業
のはかしくからずお在す由さこそ便なく思すらん幸ひ
我等が持家に明きたる處のあれば此に移り住み玉へ固よ
り家の賃はいらず侍り又養女幸女も近頃はいと成人びつ
歌も三絃も人並に勝れて善く物玉ふ其がうへ心利てお
在れば斯う申すは勿なく候へども我等が家へおこし玉は
華族方の公達を始め長州藩の武家達夜に日に出入り

玉ふから自のづと幸もあるべきにとまめくく聞ゆれば難波夫婦は涙の翻る、までに嬉みて言ふがま、に彼の家に移り幸女をも此時二代目幾松と名を改め舞妓とか云ふものになりて吉田屋方へ出しける是れ安政二年四月の事にして幸女が十四歳の時なりとぞ、それは扱置き世の形勢次第に變り來て去年の正月米國のペルリ氏兵艦を率ゐて復び相摸の浦賀に來り前年の請を申ねて求めければ幕府は列藩に命せて京都江戸を始め諸道の要害を守らせ又浦賀奉行井戸石見守并に林大學頭等をしてこれに應接せしめ遂に下田箱館長崎に碇泊する事漂流民を救卹する事薪糧を給する事を許せしが同き七月和蘭英吉利も諸港に碇泊せん事を請ひけるゆゑ又米國の例に依りてこれを許

其九月露國の兵艦攝津に來り更に回りに伊豆の下田に赴き同じく碇泊の事を請ひしかば亦先の例を引きて三港に依り泊するを許せし等外の患の此くあるに内には志士の憤起して或は外船を撃攘ふべいと云ひ又は港を鎖すべいと云ひ或は時運の變遷して漸く外事の旺りならんとする折りなれば宜しく外事を審かにせざるべからずとて外國に赴かん事を謀り幕府に四へらる、者もあり加旃大内に火事あり關西に地震あり東南に海嘯あり又今年(安政二年)江戸大に地震し明年關東に大風吹きし杯年毎に天變地妖あれは這は兵亂の萌なるべいとて人心益々安からず世は早斯うとぞ見たりける恁りし程に安政も何時しか五年となり其年八月徳川大將軍家定薨じ玉ひ世子家茂征夷大將

軍に任ぜられ同じ十月に幕府老中間部下總守を京都に派
 はし尊王の志士水戸の人安島信立鮎澤國維鶴飼知明及び
 福井の人橋本紀と處士頼醇の徒數十人を捕へ檻に入れて
 江戸へ送り頼ておれを殺したり是時幸女の幾松は以下單
 に幾松とのみ書す是れ幸女の事と知りねか(十七歳にて
 兼々頼橋本等の廷に侍りて勤王の大義を聞き居たれば心
 竊に思ふやう我女性と雖も皇城の地に産れ皇城の地に人
 となりしからは我大君の御爲に一臂の力を盡し參らせ天
 晴れ御國の民たるに背かざるべしとてよりくに石心鐵
 腸の勤王家を求め居たるぞ雄々しけれ此頃長州の藩士に
 桂小五郎とて尊王の聞え高き一個の大丈夫ありて専ら天
 下の動靜に目を注ぎ京都の濠邸に居て貴紳の間周旋し

皇綱の廢弛たるを振張して國威を海外に發揮する事を謀
 りつ、彼の月波樓に會して同志と時事を談ずると屢々な
 りき嗚呼天縁の然らしむる所か幾松は一回此の會合の廷
 に侍りて小五郎を見しよりさを鹿の音にこそたてね君な
 らばと心にゆるけるが落花の情ある流水争で心なから
 めやされば小五郎も亦捨難き思ひありて遂にうれしくは
 後の心を神もきけ君わすれずば我も忘れじと千代かけて
 契りそめける是れ此の桂小五郎は則ち前の内閣顧問贈正
 二位故木戸孝允公にして其夫人松の方と呼ばれ顧問薨じ
 玉ひし後ち髪を卸して翠香院貞秀尼と申せしは則ち此の
 幾松の事なり這は是れ後の物語りなるも序なれば斯くは
 書しつそれは備置き安政六年に万延と改元ありて其年の

三月三日水戸の人佐野光明等十六人薩摩の人村兼清と
 共に時の大老井伊掃部頭直弼を江戸城なる櫻田門外に要
 撃してこれを殺し同き十一月外國奉行堀織部正利熙老中
 安藤對馬守信正が爲政の因循なるを屢々諫めて聽かれざ
 りければ忠憤遣る方なく柳營の大評議の刻み面のあたり
 これを責め挫きつ家に歸り腹搔き切りて亡せたる杯異變
 累りに起りて幕府の威令次第に衰へ尊王の士四方に勃起
 關東も關西も轉物騷しくなりけり是年又改元ありて
 文久と號し其十一月大將軍家茂の請に由り皇妹親子内親
 王を降嫁せしめられしが是より天下の志士は愈々幕府の
 暴威を逞うして朝廷を蔑し奉るとを憤りける此時小五郎
 は尙ほ京都に在りて此等の事情を探り知り益々同志を語

らへり話し戻りて初代幾松は名を今の幾松に譲りてより
 我名を賀野と改めまた夫難波越後は常次郎と改名し吉田
 屋の長屋に住居し何時まで斯くてあるべきとて賀野の
 親里瀧中方へ同居し程なく女子を擧げれば名を玉と命
 けたつきなき中にも翳りの花と愛慈しみつ、養育ける程
 にうひくく人となりて幾松と孰れを菖蒲杜若と別き
 難き花の顔馨はしくまた髻兒のうちよりして雙美の名喧
 がましかりけるとぞ又月波樓の主人にも一人の妹ありて
 名を照と呼び這は藝妓にはあらねども時々賓客の席に出
 て興を添ふる事あれば此さへ佳人の評の高かりしが此女
 子も義氣ある者にて勤王の士をのみ親みけるにぞ其心ば
 せを愛て同じ長州の藩士來島又兵衛が妾とはなしたりき

開は兎もあれ畢竟幾松が小五郎の爲に如何なる力を添ふるやらん次の回を尋て知ねか

第四回

文久二年閏八月幕府に於て始て京都守護職を置き會津の城主松平肥後守容保を以てこれに充て尋て桑名の城主松平越中守定敬を以てこれが副となし専々禁裏を守護し奉り尊王攘夷の説を唱ふる輩を刈除き幕府の威權を輝かさんと謀りけるされば會津の臣粕谷某等は日々同謀と共に京都木屋町三條上る生龜樓に集會して密に此事を謀じ合せしが幾松は斯る席に招かれて杯酌の間に待する事あれば陽には笑ひ興じつ、賓客を待遇せども陰には彼等が言語の端々に心を注ぎ耳傾けてこれを聞取り少しも油断せ

ざりけり或る日又幾松は粕谷の席に在りて彼等の談合を聞くに今四海漸く波立て外患内憂交々起りぬ是れ實に所謂の危急存亡の秋なり且時運を推測るに外交は勢ひ開かでは叶はぬ場合なれば開を無下に卻けなば由々き椿事こそ生ずべし然るに攘夷と呼び尊王と叫ぶ輩諸處に起り動もすれば外人を戕害して國家の憂へを惹き起す事甚からず是をもて幕府は會津桑名の二藩に命せて此等の徒を除かしめらる是れ方々も能く知らるゝ所なりさりながら彼の徒には深智雄略を抱ける傑士の多ければ輕々しくは手を下し難し加以縉紳の中にも同志の輩少からざる由も深く謀り遠く慮るにあらざれば却て彼等が術中に陥り神祖以來二百有餘年の鴻業を誤るが如き事を來すべしそ

れに就きても先づ第一に某宮某家某家を語らひて外國處
 分の事を悉く幕府へ委任せらる、やう勅諭を申し承はる
 手段を運らすこそ肝要なり然する時は幕命を奉ぜざる諸
 侯も方向を轉じて再び服従するに至るべく事果して此に
 至らば攘夷の徒尊王の輩何程起り立つと雖も一朝にして
 壓伏するを得べし此事遅々せば恐くは彼等に先をせら
 れなん兵書にも言はずや先ずれば人を制し後るれば人に
 制せらるゝと、ナ、努々遅怠なせそとて互に耳を執りかはし
 つゝ私語合ふと幾松は聞きて這は好き事を耳にせしと、
 遣りければ素破大事よと後ち小五郎の方へ有し始末を言ひ
 卿の門を叩き事云々と聞か上げ爰に毛利侯より奏問せし

大和行幸の事を促し奉り尙ほそれく手配して幕府方の
 施すべき策ごとを遮り障ふるの手術を運らしける明くれ
 ば文久三年八月十日大和の行幸の旨を仰出されしが此時
 徳島、鳥取、岡山、米澤の諸藩主は不可を唱へて此行幸を止め
 奉りまた幾程もなく毛利侯と幕府との確執起り幕府を援
 くる緇紳其間に立ちて毛利氏行幸に託して陰に不良を圖
 るなりとの説を放ちければ此が爲に朝議一夜に變じて俄
 に毛利侯の宿衛を罷めし程に其藩士は侯と俱に多く長門
 へ引上げ續て侯と心志を同くせし夫の七卿も長門に落延
 たれば勤王の諸士は益々齒を切り腕を握て幕府を憎まぬ
 はなかりけり斯て文久三年八月十日主上大和の行幸を
 仰出されしに佐幕黨の間説行はれて朝旨一變し昨日まで

は飛鳥も落ちぬべき勢ひなり。毛利侯の今日は勅勘を蒙り、本國長門へ歸る事となり。三條家外六卿も侯と共に西下するに至れるまでは其間日數七八日を経て、則ち侯と七卿の京都を去り、其月十八日なりと知るべし。それは扱措き桂小五郎は其前日、吉田屋(月波樓)に在りて、幾松に幕府方の動靜を探らせ、又自らも諸方に奔走、去て經畫に暇なかりしが、十七日の夕つかた、偶々人無きを幸ひ、幾松を遠近く招きて、偕云ふやう、此ころの和女が心盡し、さこそ想ひやられて、痛まかりさりながら、功成り名遂ぐるの日となりなば、今の苦を昔語り、語りに與に樂しみを共にすべきに憂き事も多ならんが、誓ひし言の渝らずば、忍びて助け玉ひてよと言ひ慰さむれば、幾松は替もて、翼の毛を搔き上げつ、

やをら膝を其方に押向け、道は何を宣ふかと思ひ、に斯許りの事を心盡し、とて慰さめ玉ふとある。此上とも心くまなく座せかゝ兼て誓ひし言の葉は神かけて、變らじものを、今更に斯る事を宣ふこそ、憾に侍べり、开は左まれ右もあれ。昨日今日は、別て京中の騒がしく心得ぬ事のみ多ければ、自ら其身を玉とせられよ、うれく君の嗜ませ玉ふ長門(鮮)の葉を敷き、簍を一夜潰けにいたる、鮮なりを、今がた潰けたれば、明日の夕には出来なんに、其ころは必らず歸りて、食べ玉ひねと、甲斐々々しき、幾松の詞に、小五郎はいと、共切なるを喜び、明日また來んとて、頼て吉田屋を立出で、投す方へ赴き、けり、明くれば、八月十八日、俄に大和の行幸を見合はせ給ふ旨を仰出され、尋で七卿の官爵を削り、長人の京

に入るを禁ぜられしにぞ京中は沸が如く宛ら合戦の起り
 いかと思はる、許り騒動大方ならざりし此くとも知らぬ
 幾松は早約束の時刻ともなれば今かくと外に出で、彼
 方を睨み居たる折しも兼て知れる男にや裾を高く端折り
 て駈來り息吐きあへず其處に在すは幾松上臈ならずや今
 日長州様は勅勘を蒙りて急に京都を立退き玉ふ其御家來
 も皆與俱に殿に扈きて今伏見の街道から大坂の方へ引上
 げらる、其行列を見んものとしてアレ彼の人の多きを見ね
 我等も彼方へ往くになん御身もご座れと云ひ捨てどつか
 は走り去りにけりこれを聞きたる幾松は吐嗟と許り胸先
 づ潰れ這は此くしては居られじと帯引き締めつ足も空に
 續て彼處へ駈附けて人押分ち前へ出で我思ふ人ばありや

第五回

なうやと瞬もせず見てありしも絶えて我目に留らねば若
 しや先手に加はりて早落延び玉ひしかと止つ追ひつ心を
 摧き暫し其場を去りかねしが斯うして居るまも覺束なし
 と再び我家へ立戻り人傳に其安否を問ひ合せしも知れざ
 れば明日は夙めて某方を訪ひ果して主の長門へ赴きしとな
 らば我も同じく往かましとて其夜は夢も結ばず神に祈り
 佛に誓ひて小五郎が身の息災を念じ居たり

扱も幾松は其翌十九日の朝身支度もそこくに或る知音
 の許と訪ひ又は常に御蔭を蒙るやんごど無き方様に伺候
 一餘所ながら小五郎の先途を探りけるに發揮とは知れぬ
 と尙ほ京都に留り居るとの噂多ければ竊に喜び其を心頼

みに川原町なる長州邸の邊りを徘徊しつゝ、様子を探ひ居
 たる折りしも夜に入りて藩邸の門を叩き真先に三葉
 葵の紋を附けたる高張提燈を立てまた士官と思はる、武
 士が指揮旗と同じ葵の紋を附けし馬上提燈を携へ意氣揚
 やと小銃隊大砲隊を引率して出で來れるあり幾松は其紋
 所の異なるに不審を抱き如何なる諸侯の人数にやと轟く
 胸を押鎮めて小暗き方より差覗けば是れ長州の兵隊にて
 士官の内は紛ふべうなき我思ふ人の居りしにぞ餘りの嬉
 しさに怖さを忘れて駈寄りんとせしを早くも小五郎はそ
 れと察し咳にて其意を示しければ幾松もこれを合點し見
 え隠れに小五郎の後姿を見送りつ頓て我家へ歸りたり斯
 くて此の一隊は三條通りを西へ嗟峨に出で松尾山の麓よ

り柳谷山を越えて遂に恙なく大坂の藏屋敷へは着しける
 抑も此の京都落ちに葵の紋の提燈を用ゐたるは邸中に備
 へありし兵器を携へ去らんが爲めなりとは後に思ひ知
 られしとなんざる程に幾松は小五郎が大坂へ引上げしよ
 り間もなく常次郎と賀野には客に連れられて伊勢参宮に
 赴くと言ひ拵へて同じく大坂へ下り或る旗亭の仲居に住
 込み人知れず小五郎の身の保護をなし居たり兎角するう
 ち文久三年も暮れ翌四年元治と改元ありて其正月大將軍
 家茂再び上洛し攘夷の事七卿并に毛利侯處分の事を朝廷
 より委任せられしとの事に小五郎は大に驚き身を憂して
 京都へ上りければ幾松も暇を取り續て京へ歸りたり此頃
 長州にては藩主を始め一同謹慎の意を表し屢々歎願書を

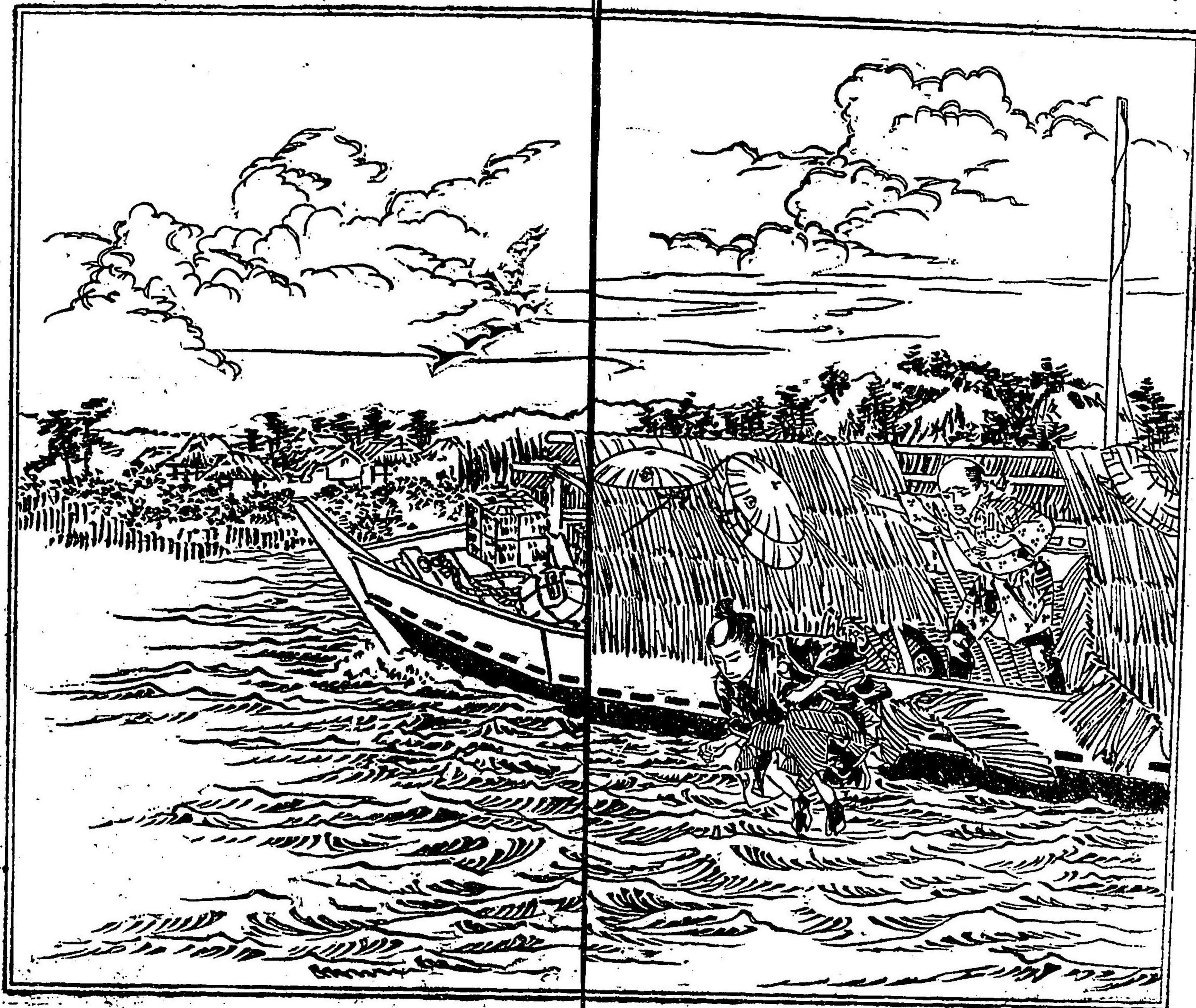
子とすべし勇氣を鼓舞して向はぬとて同前にいかんぞと
 話しの節々心に掛れば茂松は少も油断せず様子を窺ふに
 正しく小五郎等同志の人の身に罹る大事とは思はるれど
 起つとならぬ此場の仕義にいどい詮術なかりけり兎角す
 るうち早時刻ぞとて件の武士等の立去りにぞ素破我背
 のうへと氣も狂亂池田屋投して走りしが耐手は既に同家
 へ斫入り今を盛りと奮激突戦敵も味方も入亂れて切らる
 、もあり切るもあり太刀音凄く鯨波は四邊に響きて聞々
 たり是を見たる幾松は魂も身に副はず我背は如何に小五
 郎殿は敵に討れ玉ひしか又と落延び玉ひしかと千々に心
 を摧けども更に術さへ泣く許り暫く小影に伏顔びぬ抑も
 此變は則ち元治元年六月五日寅の刻の事になん斯りし程

に夏の夜の明やすくて日は東山に差昇り街衢漸く賑はひ
 つ到る處此の變事の噂のみなる也茂松は尙ほ確なる話
 しを聞ふんものと彼處此處を駈回りつ、頓て或る方に至
 りそれとなく討死の人数生擒の人数を問ひ尋ねれば此曉
 池田屋へ向ひしは會津藩士及び新撰組併せて百人にして
 長藩の死者は吉田俊鷹(松蔭)の甥なり松山長藏本山七郎其
 外八人又捕へられしは廿六人にて目撃す所の桂小五郎が
 其人数の内居らざりしかば討手の者と力を落し段々跡
 を糺せしに全く一兩日前大阪へ下りしとの事が知れしに
 ぞ新撰組の誰れ彼人数陸と船との二手に分れ今がた出發し
 たりと云ふに僅に心は落着しが追躡大阪へ向ひしと聞き
 爰時も猶豫し難しとて急ぎ我家へ立歸りぬ是より先き小

五郎は同志に推選せられて弾薬運送の爲め大坂に赴き新
 町の某方に潜みて密々に其準備をなし居たるが兼て大坂
 に下る時は某方に居る由を幾松も知れるにぞ他の用事に
 訛りて人知れず五日の變事及び追躡嚴重なれば努々油斷
 し玉ふなどの事を云ひ送りけるに小五郎は慨歎に堪へず
 益々憤り居たる處へ早くも此潛居を彼の山崎晉が探知り
 て報じたれば討手に向ひし新選組數人一度に同處へ踏込
 み終に小五郎を捕らへたり是れ同月七日の事なりとかや
 斯くて白晝京都へ護送せば同志の者がこれを奪はんと立
 騒ぐなるべしとて故と其夜三十石船を買ひ上げ諸士警衛
 して京都へ上る道すがら橋本驛の邊りにて小五郎は衛兵
 に放尿の事を告げ舷に憑りト隙を窺ひ河中へさんぶと跳

り入りければ這は一大事と衛兵は八方に手配りして搜索
 せしも更に行方は知れずなりぬ桂小五郎が大坂にて新撰
 組に捕へられしとの事の早くも京都へ開えて噂どりと
 なるに幾松は我身も死なまじ欲しけるが未だ其生死の程
 も定かならざれば此上は神佛の冥助を仰ぐより外なしと
 日頃小五郎が武運長久を祈り居たる清水寺の觀世音に念
 々丹精を拙て祈念しけるが今日も人の起きぬ間に曉
 を胃し清水投して往く途中今産院阪を過ぎて高臺寺の中
 を通らんとする折りしも傍の敷陰より頰冠して面を包み
 身には單衣の濡れたるを着せしいと怪しげな一人の男が
 現出で後前を見回しつゝ其處へ往くのは幾松ならずやと
 聲を掛くれば幾松は大に驚き一足飛退きて反顧と彼の男

は頼て顔の手拭を外して小手を擧げて魔くを見れば思ひ
 がけなき小五郎なるに涙のはふり落るまで打喜び是も観
 音薩陞の利生ぞと數回彼方を伏拜み頼て敷蔭に立入れば
 小五郎は前夜の始末を語り又響に送り文の事どもを謝
 し兼々和女が我爲に清水へ詣づる事を知れば此處に潜み
 て待つ事久し扱此上は他に身を置く所のなきま、如何に
 もして今回の危急を救ひてよとあるに這は勿体なし頼み
 玉はずともいかで此儘に別れ参らすべきされども晝は入
 目の多ければ却て危ふかり夜に入りて密に迎へなんに忍
 へて暫し潜み居王へあな畏こ人にな見咎められ玉ひそ食
 物は今日云々の處へ置くべしと云ひ咄え後を約して立別
 れ先づ清水に詣ふで利生の灼焉なるを賽うし其の歸るさ



に餅數多を買ひ密と彼の藪蔭に置き直ちに家へ歸り左様に
右様考へ一が別に然るべき術なきゆゑも角も二階の旅籠へ
と思案を定め其夜再び高臺寺へ赴き小五郎を連れ歸り
件の旅籠へ忍ばせけり

第六回

却説幾松は小五郎を我家へ隠匿置き其身は日毎東閣西樓
に招かれつゝ密に小五郎が追躡の様子を窺ひしに探偵頗
る嚴重にして或は乞食紙屑買等種々様々に打扮て家々を
探り回れば蟻も潜めぬ許りなりしが日數十餘日も過ぎ
て漸く巷の評判薄らぎけるにぞ幾松は稍々落着て或る夜
人無き機會小五郎に云へるやう此頃は少しく御身の磨の
開えずなりしが探索は尙ほ緩まず其上長州よりは二三の

大夫が軍兵を率ゐる此地へ押寄せるとて會津薩摩其餘の藩々には防禦の準備とりぐなれば追々隱密の嚴しくならん
 に此儘此處にお在りては今に危き事もあるべく再び彼等の手に陥ち玉は、其時は忽ちに失はれんに今の内一と先づ京を落延て豺狼の牙を避け玉へ聊なれども此は路次の資にとて金若干を出し涙ながらに勸むれば小五郎は其厚意を謝しこれを受け納め故さらに古單衣一枚を着藁金剛の薙刀狀なるを穿き手拭を具深に冠り頓て忍び出でんとする時茂松は今更にまた幕く暫くと小五郎の袂を扣へ嗚我香よ針の越の世の中なるに道々も心して努々油斷し玉ひそ雲時とは云へ別れと思へば哀しかり落附く先きの定りなば鴈の便りに知らせて給ねと命の露に袖濡らす佳

人が幕夫の状態は籬の下の海棠の雨に惱むに髣髴してあるべきならねば後を誓ひて小五郎は其ま、袂を分ちけり去る程に其年の七月果して長藩の福原越後國司信濃等伏見まで來り此地にて時の大目付永井主水正と應接ありしが終に蛤御門の變を起したるより京中長人を搜索する事一層嚴密となり茂松と小五郎の事さへ探り知られて痛ましくや雛鳥の鷲に攫らへられしが如く茂松は新撰組の猛者共に捕へられ火水の阿責に逢ひけれども石より介き哲婦の心はいかで輒ばすべくも見えず如何に痛く責め玉ふとも固より知らぬ桂殿の行方を告げ進らすべうもなし、成程初手は彼の殿も屢々招きて彼に此くと宣ひし事のありつれども會津及び新撰組の方々に最負せらる、由を知り

てか其後は一度も呼ばせ玉はず人傳に聞けば妾が強きを
 憤りて他に増す花を手折られしとかされば妾も其後は不
 通に出逢ひ進らせねば死し玉ひしや生てお在すや少しも
 知らず侍るなりとて再三再四の拷問も終始詞の變らぬ也
 流石の暴士も責飽て終に細目を免しける是より先小五
 郎は幾松と袂を分か往くと七八丁にして先づ四邊を見回
 し悵然と天を仰げば斷續の浮雲は遠き空に走り雲間の月
 輪は梢に珠を散し鴨川の流は深々として耳を清し遠寺の
 鐘は沈々として心を閑かにせしむ未だ宵ながら此頃の物
 騒しさに往來も途絶え乾坤寂寞と犬さへ吠かず唯聞ゆる
 ものは諸藩の屯營にて火を警まむる撃柝の聲のみなれば
 馳て遙に皇居の方を伏拜み筋に申さく微臣國家の爲にす

衷を盡すと茲に數年如何にもして朝廷を蔑如し奉る姦賊
 を誅除し奮て皇運を挽回し進らせんと肝膽を摧と雖も榛
 蒙途に横はりて言路疏通せず寡君は遠く宛に孤城に泣き
 微臣は近く憤に京洛に咽ふ然り而て否運益々薄り微臣
 をして跼躄身を措く能はざらむ故に今方に遠く此地を
 去らんとす然れども國家に竭す所の微衷は愈々固く誓て
 妖雲を排て天日を發耀せしめんとを期す此心正に皇天皇
 土の知るありと數回頂拜して塵打拂ひスツクと起ちしが
 賢々焉として去るに忍びざるが如く忠士の心を想ひやら
 るれ斯くて一二丁も來たらんかと思ふ折りしも覆面頭巾
 に顔を包みし黒装束の大的男が前と後とに二三人現れ今
 にもあれ拔連れて斫菴らん有様を小五郎は早くも察し斯

る時にと用意せし按摩の小笛を取り出し二吹三吹き吹きけ
 るが實に天幸の然らむる所か彼方の家よりヲイ其處な
 按摩よ按摩よと呼ばれしにぞ是れ幸ひと心に喜び聲可笑
 しく應じて引かるゝまゝに内へ入りぬこれを見たる件の
 武士等は迭に耳を執り換はし何かくどく私語合ひて右
 と左りに立分れ何處ともなく影を隠せり暫くありて小五
 郎は彼の家を出で吐嗟の妙計中れりと腹に笑ひつ素知ら
 ぬ体に尙も小笛を口にして吹きすさみつ、木屋町より川
 原町に出でんとする時圖らず一人の武士に出逢ひつと月
 影に顔を見合せ御身は桂氏と云ふ貴殿は大島氏か、シテ其
 体は、シイ按摩針を呼はるにソレと悟りて彼の武士は故と
 聲を揚げコリヤ按摩我等が屋敷は直向ひの横町なれば氣

の毒ながら一緒に來て癡癡打て玉はれと先に立ちて案内
 一行手の屋敷に入りける此の武士は對州藩の大島某と
 て同じく勤王家の一人にして兼々小五郎とハ無二の交り
 ある者なりしとぞ扱又茂松ハ小五郎を落し遣りしが道路
 も如何あるらんと按じ過しのせらるれば只清水寺の觀音
 を心に念じ間眠もせず其夜を明せしがそれより八九日は
 心地悪しと披露して客の庭にも出でざりけれども斯く家
 にのみ籠り居ては世間の様子の知れざるも推して勤に
 出ることよけれと自ら心を勵まして身仕舞杯して居る處へ
 某樓より幾松を名投して呼びに越したれば定めて會津の
 客ならんと進まぬながら支度を整へ箱奴とか云ふ男に引
 れて至り見るに是れ會藩の人ならで小五郎の知邊なる對

州の大島外二三の人なるにぞ安堵の思ひをなせり。松は小五郎に別れてより心樂まざ打肅條りてありけるが。偶々の客の招きに至りて見れば大島等の一座なるに心落。かて憂が中にもまめくく待けるにぞ一同は打嬉び。長閑に興を罄して歸りぬ。此時松は大島の袂を扣へ兼て。しも知りぬす桂氏は前の日我家を落したるより今は何處に坐すにや君には日頃の昵淺からねば若し先途を知し玉。はんかと問ふに大島も前夜の事を語り聞えんとは思ひ。も壁に耳ある世の中なれば浮とは口を開き難しと只目も。て事の意を傳へ其日はさりげなく歸りけるが日數経て一。人忍びつ、三本樹の籠中方を訪ひしに折しも松は居ら。で常次郎と賀野に愛女玉松との三人のみなれば不審みつ。

、話のなへに茂松の見えぬを尋ねければ賀野進み寄りて。申けるはさればとよ彼は女に似氣なく此ごろ世に言ひ。す尊王攘夷とか云へるをよき事に思ひ馬が合ふてか長州。の桂小五郎殿と深く馴染め餘所ならぬ仲らひなりしが先。ころ始御門の變事より一屏長州人の追捕嚴しく今は彼の。藩の人は影も留めずなりぬるをひたもの憂き事に思ひ閉。籠りして在りしが二三日前一通の遺書して何地ともなく。出で往きぬ察する所桂殿の後を慕ひ長門の方へや落ぬら。ん今の世にあられもなき不正事云ふ人を慕ふとは是ぞ。諺に云ふ鬚喰ふ虫も嗜好の人心とや云はんされども彼が。家に在りし日は如何なる椿事の湧ちんかと安き心はな。りしが今忽ち在らずなりて結句安堵の思ひぞすなれど常。

に異なる賀野の詞に辛き世の人心とて昨日までは親と敬
 ひ子と呼びし盟も茲に薄氷り解けし縁の糸薄穂にあらは
 れし浮薄の心を大島はうたてく思へどさあらぬ体にて扱
 は茂松女郎は家出玉ひりかさるにても宣ふ如く女に似
 ぬ心ばへなりされば此上は子とも見玉はで捨てらるゝに
 やと云ふに常次郎は詞を繼ぎて既に玉松のあるうへは彼
 の如き雄々しきものを家に置きて禍罪を買はんは無益な
 れば假令歸りしとて家には入れず候と思ひ定めし返答に
 大島は思ふやう今其詞に依るときは茂松を與へよと云は
 る容易領承するなるべく彼が桂に盡くす所は妓女に稀な
 る心烈なれば我兎も角も彼を引取り正しく媒酌の道を踏
 みて桂に嫁せしめ兩情伉儷の思念を果させん爾なり

と心に決し頼て懐中より五十兩の金を取り出で常次郎の前
 へ差置き扱云へりけるは喃漕中主今改めて和殿に願あり
 其は別儀にもあらず則捨玉ひたる茂松を今日より我等に
 譲られよ此れは聊なれど女郎を貰ひし當座の謝儀枉て領
 收ありたしと云へば夫婦は莞爾ほゝえみつ捨しものを拾
 はんとて大枚の五十兩這は勿体なく侍るなり其方へ收め
 玉ひてよと推戻すを強て残り留め暇を告げて歸りけるが
 それより大島は手を盡して茂松の在家を探りたるに東寺
 の邊りなる某とて以前月波樓の料理人をしたる男の家
 潜みて忍びく小五郎の音信を伺ひ居けるを尋ね出し
 我が養女となり兼て己が家に匿し置きたる小五郎に逢と
 ぬめ更に自ら媒酌して合登の禮を行ひけるが日蔭の身な

五十六
れば是非もなき人目包みの奉書に雌蝶雄蝶も形ばかり千代を壽く差鍋の綴蓋ならぬ妹と脊の鴛鴦の衾も暖く芽出度夢を結びなるべし

第七回

斯て大島は我媒酌して幾松を小五郎の妻女とせしも尙ほ世を忍ぶ身なれば姿髪を褒させ襲婢として匿ひ置きしが或る日の夕方大島は小五郎を敵手に一間處にて蕭條に碁を圍み幾松の松女は臺所にて明日の炊の支度をなし居たる折しも外の方向となく騒ぐて物々しく装ひし武士多り家の周りを立回る様子の子のいと心許なきに急ぎ奥に駈入り密かに云々と大島に告ぐれば大島は小五郎に目禁してツと坐を起ち其ま、影を隠しけり斯る處へ二三十人の暴

武者どやくと込入り障子襖を睨開きつ、搜り回りに不審顔に、今まで居し大島桂の、忽ち見えぬが心得ね、如何に齋藤、喃武藤太、何さま彼奴の疑いと屹と松女に目を注ぎ矢庭に其場で綁し上げ歩みをらうと暴々しくも本願寺境内なる新選組の屯所へ有無を言せず引立てけり無慙や松女は姫百合が葛の蔓に纏れし籬の下女郎花の風に揉れし風情にて日毎に苦楚の筈に撻れ桂の所在を告げよか大島が行方を白状せよと拷問吟味數日に亘れど烈婦の石心争で撓まん固より義理あり情好ある夫と大島の安危に掛る大事の場所と心を小めて墓々しく答へもせず責らる、まゝ知らぬと許り終始變らぬ陳辨に今は推問も是までなりと縄目を解て放免せり松女は始て虎口を脱れたれども對

州邸には最早大島も小五郎も居るべき筈なれば今更身の便着なきに困じ且つ彼の二人の安否を案じ如何はせん
 と煩ひしが扱あるべきならねば兼々清水へ参詣せし折り時々立寄りて休息せし笹屋と云へる水茶屋へ忍び往き身の不幸を告げ聞え暫忍ばせてよと乞ひけるに主人は頗る義氣ある男なれば否なくこれを領承し心安くお坐せよとて忠實しく待たすに稍安堵しつ次の日主人に頼み密に三本樹なる妹玉松を人知れず招き寄せまづ奥まりたる坐敷に入りしが其の同胞にはあらざれど此の年月親昵かりける仲なれば先だつものは涙にて雲時送に手を執りつよよ許りに泣伏せしが玉松も松女の教にや依りけん尊王の志厚く姉と共に小五郎を助けし事のある程なればやをら

涙を押拭ひ姉に向て言へりけるは御身の家出玉ひし後大島主の立越され云々の事侍りしとて當時の物語をなしければ松女も大島に貫はれ更て小五郎と正しき婚禮をなせし事より這回の變事までを落もなく語り扱是より尙ほ風に梳り草に宿りても二方の行方を尋ねばやと思ふなり
 それに付きても無くて叶はぬは盤纏なれば其を和御前に頼まんとて推して此處へは招きつれ姉甲斐なしと思さんが是も貞操の道芝の露の心を酌分けて兎も角もして給はれと懇に頼みければ玉松は快くうけがひて云ふやう此事に就て不測の事こそ侍れ今朝も早く起き出て表戸を開けんせしにパタリと音して落るものあるに何物にやと手に執れば玉松へとのみ書しありて外に名前の見ぬされ

ば尙ほ訝しみて封押切るに内には金子十五兩と此金は頼
 て用ゐる時あらんに親には告げで秘置けと二行に書せし
 書附ありければ要こそあらんと納め置きて今も此に持
 て居り察する所大島主が御身の爲に用およとて寄せられ
 しものにはあらざるか其は左も右もあれ此を御身に進
 らせんと懐中より件の金を取出して渡せば松女ハこれを
 受け收め尙ほ一日二日は此に潜て夫の行方を尋ねべけれ
 ば母にも努々告げ玉ひそと詞を誓ひて分れけるかくて松
 女は日毎に人目を忍びつゝ、遠近と小五郎の行方を尋ねけ
 れども曾て手掛りのなきより思ひ届いて或る日京に有名
 き卜筮師長谷川白叟と云へる人の許に至り我思ふ人の此
 程行方知らずなりしが今は何處に居るにや又其身に恙な

きや杯占兆を乞ひけるに白叟頓て筮竹を把り算木を置き
 て大に驚き這は芽出度人なるかな今は尙ほ美玉の積中に
 あるが如くなれども終に志を貫きて瑩々たる光輝を發つ
 べき卦なり但し身は無事にして此地を遠く去らず大津京
 伏見の間にあるべしとの事に松女はいと頼母しく思ひ
 それより教へられし方を探せしが似通ひし人にも逢はね
 ば心頻りに焦燥つゝ三日目に三條蹴上げを通りけるに粟
 田口と日の岡の間なる字姥ヶ懐と呼ぶ處に多くの雲助と
 か稱る遞夫の居る其内に手に竹漕を携へ身には海藻の如
 き襪襦を纏ひ破し草鞋を穿き垢に汚れて臭げなる手拭を
 真深に短り木の根に腰打掛けて頼伴と物語りする男ある
 が何となく小五郎に似たれば若いやと心まづ轟きしが屹

と思索し彼方の松原に見ゆる懸茶屋に往きさらぬ体にて
 茶酌の婆に向ひ云々の處に箇様々々の男あり其に些の用
 事あるに此處まで招きて玉はれか。此は少許なれども使
 の足代なりとて錢幾等かを與へければ婆は否なく諾ひて
 出往しが程なく歸り來り女中聞れよ彼の雲助に宣ふ由を
 告げたるに、ナニ美麗女が已を呼ぶと、それは近頃耳よりち
 やが多分人の見違ひならんに遙々出掛て外さる、より問
 屋へ往て荷を擔が結句間違ひなかるべし喃播州さうでは
 ないかと笑ひつ、杖を肩げて大日山の方へ急脚に往き過
 ぬと氣の毒さうに語るを聞き松女は直ちに其場を立出で
 大日山まで急ぎに麓の原にて追附きたり扱呼留て顔を見
 れば果して小五郎なりしにぞ前と後とに目を配り側の木

蔭へ招き寄せ此ごろの事を搔摘で語開えつ何しても此地
 に在りては危きに一先但馬へ落延ぶべし彼の國には知邊
 もあり潜むに便ありからし今宵清水の境内なる斯々の茶
 屋へ忍びて來ませ此家の主人は重介とて先年月照上人に
 隨ひ薩摩がたに立越て幾十の苦辛を嘗し人にて信あり義
 ある性なれば万事談合の便宜ありと私語き示し後を約し
 て分れけるそれより小五郎は南禪寺山に分入りて日の暮
 る、を待ち又松女は笹屋に歸り密に重助に事の意を告げ
 我衣服調度より小五郎の身支度まで心積りして夜に入る
 を待居たりけるに其夜人定り頃小五郎は南禪寺の山を
 出で先刻教へられし清水の笹屋に來り音なへば松女は打
 喜び急ぎ我居間に請じ用意の衣服と着更させ食事を勧め

杯して頼て重介及び其母に引合はせ扱落往先きは一
 旦但馬と定めしが尙ほ外に便宜好き處もあらば教へられ
 よと松女の談合に重介は暫く腕拱て考へしが丹波の何鹿
 郡は我等が故郷なれば兎も角も彼の地へ下りて見玉へか
 一されども銀山の變より勤王家の穿鑿嚴重なるゆゑ彼處
 とでも決して油断は仕難かりさは云へ御身等二方の才智
 ならば機に臨み變に應ずるは難き事にもあらざるべし何
 一ても此地に居るは湖き氷の上座して日の照らすを待
 が如く自ら共身を殞すと云はんか危いかな危きかもと閑
 談數刻に及びしが寝よとの鐘に一同行は明日また談合すべ
 一とて就れも臥戸に入りけり左を右にするうち鷄鳴東天紅
 と告げ渡るに皆々起出で再び前夜の話を繼ぎまづ小五郎

は小間物商人に身を娶し重介の母の世話にて松原通
 富小路の小間物問屋日野屋右衛門方にて貨物多く仕入
 れ松女もそれく支度を整へ重介親子に此頃の禮を陳べ
 て夫婦二人が手を執り交し丹波を志して立出ぬ路次も關
 所の設けありて中々に危き場所に出合ひしも終に首尾好
 く投す方に到り暫く身を潜め居たるうち同國福地山藩士
 柄木某が小五郎追捕の命を受け専ら丹波地方を搜索する
 と聞き此處も針の麤ぞと安き心はなかりしが其内貯の金
 も残り少なくなりて又もや饑餓の苦に陥いらんとするを
 恰も好し但馬國城崎郡なる瀬戸の甚八と云ふが商用にて
 丹波へ赴きけるに甚八に至て忠實しき男なれば圖らず小
 五郎の困難なるを見て痛まじき事に思ひ或る時云ふやう



斯う申すは無禮ながら御身は根からの小問物屋とは思は
 れず又固よりの貧者とも見受けられず如何にして斯る片
 田舎に吟行來り箇様に困苦せらるゝにやと問れて初は墓
 々しく答もせでありしが漸く應へけるはさればとよ問は
 る、如く生得の小商人にては候はず何を隠さん我等は京
 都の者にて此う云ふは面伏なれど父は某とて京で指折り
 の温戸なれば多くの手代番頭を召使ひ何不足なき身なり
 しも思ひ起せば去年の夏四條の涼の歸るさに不圖友達に
 誘はれて祇園新地の某樓へ上り遊だ時に出た藝妓は是れ
 此女にて候が其頃は小花と呼び逢ふた初手から捨難き思
 ひは同じ想夫戀歌に心を通はせつ結だ夢が仇となり夫よ
 り日毎夜毎の通路積りつぬ關守の目を忍び根引して家を

持せ其方にのみ身を置て父母への孝もうはの空そらだの
 めなる樂しみが忽ち報ひて勘氣を受け土地にも居られぬ
 仕義となり知らぬ此地に苦患を受くるも親の罰とて是非
 なく候と云ふを甚八は打聞て若き時には有る習ひ追附勘
 當も宥されんに辛抱するこり肝要なり袖振り合ふも他生
 の縁及ばずながら我等が引受け届くだけには力を添んに安
 心してお在かいと終に甚八が知音なる但馬の出石なる鑄
 物師町の名主鍋屋喜兵衛方へ手紙を附て兩人を托し遣り
 しかば喜兵衛も淺からず小五郎夫婦を待遇し程なく喜兵
 衛の口入にて同じ地の宵田町なる魚商重兵衛方へ寄寓せ
 ぬ

第八回

小五郎夫婦は鍋屋喜兵衛の世話にて出石宵田町なる魚屋
 重兵衛方へ寄寓し其身は日々小間物を脊負ひて遠近に商
 ひしまた幾松は旅藝妓となりて諸所の料理屋に招かれ心
 にも無き艶辭追従に愛嬌を賣りつゝ夫婦諸共に飽まで身
 を緇晦し居たれば是ぞ勤王家の魁先たる長藩士桂小五郎
 なりとば知る人絶えてなかりけり然るに出石藩の同心頭
 京田十一右衛門は疾に其の常人ならざるを察しけん或る
 時屬下の者を派して小五郎を我役所に召し嚴に説けるは
 近頃長州の浪士各所に徘徊し動もすれば容易ならぬ企望
 を謀る由風聞あるに依て京都より我藩へも通達ありて追
 捕おさく嚴重なり故に他所より入り込む者は武士町人
 の用捨なく召寄せて吟味に及ぶなり汝も近來城下に來り

小商をなす趣き聞えたれば斯くは召喚して尋問いたすな
 るが是までの來歴并に携へたる女の儀まで子細に申上ぐ
 るべしとあるに小五郎は素破こそ身の大事と思ひけれど
 も中々に憶する色なく前の日瀬戸の甚八に語りし如く京
 都の産にして不圖遊里に足を運び初め身を放蕩に持崩し
 たる報にて親より勘當を受けられたれば詮方なく馴染し女と
 共に心ならずも故郷を迷ひ出で些の知邊を便りて此地へ
 は來り候なれと言巧に言ひければ京田の思ふ旨やありけ
 ん此日は其儘下けるが尙ほ日數經て松女をも呼出し種々
 尋ね問ひかども小五郎の申す旨と露違はざるより再び
 強て問はざりしとどさりながら此時京田が小五郎を吟味
 せし事の体は官命を空くせず我職掌を盡す裡に自ら武士

道を存して梓弓引も發たぬ情ありかば小五郎は寧そ我身の素性を打明て密に保護を頼まんかとは思ひしが人心の浮とは測り知られねば斯くは黙止して言はざりけるとの後に小五郎が或る人に語けるとかや這は箇處に用なき事なるが序なれば訛すのみ兎角するうち追々追捕の沙汰聞々ければ此處も久戀の地にあらずとて出石より六里程隔たりたる丹後國熊野郡久美濱へ移りぬ這は便舩して馬關に下らん心算なりけり抑も此久美濱は天領と稱へて幕府の直に領する所なれば代官所を置き徳川の役人出張して成敗を掌るなりされば諸侯の領地と事異り殊に所謂社鐵の虚威を恣にし人民を虐ぐる事多しとなん小五郎は久美濱に至り或る旅籠に宿を求めて出石に在りし日の如

く小間物を商ひ傍ら松女をも酒席に出し路次の資を稼がせつ只管便舩を待居たり扱土地狭き所は善きも悪きも聞えやすく久美濱にては松女の評判高く這や聞ね此ごろ某屋に泊り居る夫婦の客人は男が三十二三にて女は廿一二なるべし此女は京の藝妓とか云へるが怎さまさもあるべきか色の白さ体格の仕こなし何れ疎はなかりけり男もまた藝人にて小間物を賣る間には顛話しに客の氣を取る彼もそれ者の果ならんかと瞬たりなるからに何時か此事代官所に聞えければ代官田中某は組下の者に吩咐て密に蹠蹠を探らせける久美濱の代官田中の組下は日毎に身を窶して小五郎が泊り居る旅籠に入り込み段々蹠蹠を探りけるに俚諺に云ふ蛇の道は虺とかやにて忽地これを洞

察し女は正しく京都の者と思はるれども男は長州の訛り
 あり且つ人品骨柄生得の町人とも見えざるの密告に田中
 は獨り心に黙頭出口々々に綱を張せ落行道を固めたり小
 五郎夫婦は斯ども知らず指僕へて長門への便船を待居た
 るに明日は馬關への船ありとて泊合せし人々のとりぐ
 様々立騒ぐにぞ松女も小五郎と諸共にりれく身支度を
 なし居る處へ捕手四五人ばらくと込み入り御用さうと
 呼はりて小五郎松女を用捨もなく代官所へこそ引立けり
 夫婦は一旦驚きしが是も天なり命なるかもと覺悟をな
 てわろびれもせず引かるとまゝに白洲に至れば代官田中
 某なるべし儼然正面に座を占めたる一人の官吏が小五郎
 に打向ひ道や汝は何國の者にて何用あつて長州へ下向す

るやと尋ぬるに小五郎はやをら面を上げされば候下輩は
 周防の國若國なる錦帯橋の邊りに住む小問物商人松屋準
 右衛門の倅孝助と申す者にて候が昨年の春貨物仕入の爲
 め京都に上りけるに圖らずも仲問の者に誘はれて島原の
 廊に遊びける刻ト云ひ掛け少く赤面の体にて此なる女が
 酌取りに出けるを見てしより意の駒の羈外れて雨の降る
 夜も風の日も通ひ詰たる遊びの入費に仕入の金へ穴を明
 け此はと始めて氣は附けど思ひ切られぬ悪縁とて一層膽の
 太くなり不孝と知りつゝおほけなくも遂に女を根引つ
 暫く此女が親元へ同居し序もあらば國の親へ書状を出し
 て詫んものと時機の至るを待つ折しも去年(元治元年)の七
 月十九日長州藩士の騒動ありて京都は修羅の巷となりし

に素破大變と周章狼狽此女の手を取り立退きしが不愍や
 彼が母なる者は外玉に中り途にて敢なく最後を遂げそれ
 よりは益々く世の便着を失ひ已むを得ず持合せし些の小間
 物を商ひし又此女には兼て覺えの酌取をさせつゝ行當り
 卑益と共に草枕何方を當と定めもなく都を出て浪華に下
 りしが此處も中々穩かならぬに斯くては商買も覺束なし
 さらば此上は假面を被て故郷へ歸り親に詫て家へ入らん
 と漸く迎りて此處までは來り候なりと口に任せて長々と
 無き空言を有明の月夜鴉のうれならで信しやかに云ひ黒
 むれば田中は始終聞畢り汝が申す所偽りなくば尙ほ證し
 となるべき品々を一々これへ示すべし若し少くにてても虚
 言あらば屹度處分をなすべきぞと音高に誑てければ小五

郎は斯る時の用にもと兼て拵へ置たりける判取帳仕切判
 等を取出し細々と陳述せしにぞ田中は始て笑まじ氣に汝
 が申す處偽りなし依て放免するものなり何時にても勝手
 次第に出立すべしと身の假を取らせたればまづは虎口を
 遁がれけりと小五郎夫婦は打喜び急ぎ濱手へ至りけるに
 此日の船は早出帆して明日ならでは出帆なしとの事に是
 非なく再び旅宿に歸りぬさても小五郎夫婦は翌日の便船
 に打乗り海路障りなく馬關に着きければ始て晴天を見た
 る心地して勇み立ちつゝ來る折しも彼方より二人の女來
 り喃々それなるは三本樹の幾松さまならずやと云ふに驚
 きてこれを見れば京都下川原なる曙亭の娘にて姉を花と
 呼び妹を雪と呼ぶ二人なれば松女は夢かと許り喜びつ不

測な處にて逢参らするものかなシテ爺嬢は如何せられ
ぞやと問ふ端に二女も松女の恙なき悦を聞え扱桂様は如
何せられしやと云ふ時小五郎は一足後より聲を掛け珍ら
しや花女オ、雪女も共に在すや我も其後種々の事に逢
ひ終に箇様の様になりけりと打笑ひて側近く進みけるを
見て二女は只管歎息し兎も角も其處は往來なれば是非と
も妾の方へと前に立て案内するに小五郎夫婦は其後に附
きて頓て二女の家に至り道は是慶應元年四月十五日の
事なりとかや斯て曙亭の主人は小五郎松女の來れるを見
て涙ぐむまで喜び合ひ寒さ暖さを問ふ違なく此ごろの世
の様を語り出で水火の中を恙もなく此の處までは來
ませしぞと尋ぬるに小五郎はまづ主人の無事を祝し我身

の上もさる事ながら汝の此地に來れるは何時の事にあ
りけると問はれて主人は小隠を進めされば候小可は一昨
年の變事より會津桑名の探偵殿しく彼處は長州の出入場
なれば必らず藩士の潜めるならんと夜毎毎日の穿鑿に商
買どころか身が危く今にもあれ縛り首切れんかと安き心
のなきまゝ、高杉品川御兩所のお世話を受けて家族を繼
め其年九月某の日に遁るが如く當地に來り旅宿料理屋を
兼帯に細きながらも烟を擧げ今日まで安く送り侍りと語
る傍に姉妹は互がはりに茶を酌て小五郎松女に勸むれば
此に喉を潤して小五郎も我身の上の艱難を告ぐれば松女
も語を繼て苦心せし條りを語りつ閑談數刻に及びしが早
夜深にもなりし程に各々臥房に入りける是より夫婦は

當家に暫く足を駐め居たるが其後小五郎は奇兵隊の大監
 察に擢でられ名を木戸準一郎と改稱し益々各藩の有志と
 通じ東奔西走遂に能く維新の大業を成しけるが松女は始
 終陰となり陽となりてこれを輔ける内助の功こそ微妙け
 れざる程に時勢漸く切迫して慶應元年幕府征長の兵を起
 し將軍家茂大坂城に在て軍事を指揮し明年大舉して長藩
 を攻めいかども連戦利あらず尋で家茂薨じ玉ひしかば東
 軍阻喪して大阪へ旋り其歳九月詔ありて討長の兵を弭
 めしめらる是より幕府の威令頓に地に墜て大藩復此が節
 度と奉ぜず同き十二月先帝崩御あらせ給ひければ民皆
 考妣に喪するが如く八音を遏密して悲哀の意を表したり
 き斯て慶應三年正月今上天皇御即位あり其年十月大將

軍徳川慶喜公政權を奉還す是に於て中興の偉業成り十二
 月朝廷三條毛利諸家の官爵を復して京に入る事を許し給
 ひ佐幕諸卿の入朝を禁じ會津桑名の藩主に命じて國に就
 しめ薩土、越前藩をして代て宮門を守衛せしめられ又攝政
 關白、征夷大將軍、議奏、傳奏、守護職、所司代等を廢し新に總裁
 議定、參與の三職を置かる、等諸々維新の御政事を施かせ
 給ひぬれば四海始て天日の麗なるを拜み奉り國人萬歳を
 祝ひ進らせぬはなかりける是併ながら聖徳の然らむる
 所なりと雖も亦勤王諸士が盡せる赤心與て力ありと申す
 べしされば木戸準一郎氏は中興の業成るに及び徴されて
 總裁局の顧問となりそれより累りに進で明治二年賞典祿
 千八百石を賜ひ從三位に叙せられ同き十年西南の變起る

に及で自ら征討の任に當らんを請ひけれども聽されず
 其年五月廿五日勳一等を授け旭日大綬章を親授せさせ給
 ひけるが其翌廿六日病を以て薨ぜらる依て正二位を贈ら
 れ金幣を賜はりける其偉勳ハ世人の既に熟知する所なれ
 ば詳しく書すもくだく一かるべし斯る賢明の良人に冊
 きて終始心を貳にせず幾多の艱苦を事ともせず流離顛沛
 の間に從て女の道を盡せる松女の操空一からず遂に松の
 方と呼ばれ畏くも皇太后の拜謁を賜はり事も度々あり
 りて行啓の刻に御陪乘を勤められける事もありとかや
 それ扱置き松の方は公が薨じ玉ひし砌り共に消えんと
 歎き悲しまれけるが漸く人々に諫め勵まされければ責て
 はとて飾りを削り翠香院貞秀尼と法名して長く公の菩提

を吊らばれける抑も斯る勝れし賢婦なれば初め京都木屋
 町の別館に移りて後は難波常次郎并に賀野にも昔日の恩
 を報いんとて物敷多とらせ終身安く養はれ水崎要夫婦
 の行方をも捜して引取り篤く養育まれ尙ほ夫婦の仲に産
 せし政次郎、信の兄弟までも學びの窓に養はれ一抔至らぬ
 限ぞなかりけるは誠に有り難き志操と稱へ進らすべくな
 ん又義妹玉松は顧問が養女として河瀬秀治氏へ嫁せしめ
 られ曙亭の娘花女をも顧問が媒酌して藤村紫朗氏に嫁せ
 しめ妹雪女も河田景福氏へ嫁せしめられぬ這は復古の後
 程もなき事なりとは聞けりさても人の命は草に置く露
 の如しとかや翠香院貞秀公は去る十九年十二月病に染み
 醫療もおさく怠らざりしが翌年の二月より次第に重り

來て終に同月十日四十四を一期として歸らぬ空に赴かれぬること痛ましくけれ今尼公の墓誌を左に掲げて此冊子の結尾とはなさぬ

君名松子。京都人也。爲人貞順婉淑。文久慶應之際。方贈正二位前内閣顧問木戸孝允公。執掌王事。知其爲人可深相結託。扶之於流離艱難中。終爲配。後禍亂戡定。公立廟堂。參與樞機者。君貞烈之德。爲之輔翼居多焉。及公薨。薙髮。法諱稱翠香院。寡居于京都木屋街別邸。奉仕公廟。十年如一日。明治十九年二月。罹胃病十日終不起。享年四十四。嗟呼哀哉。

松菊餘芳 凌霜談 終



明治廿二年四月十六日印刷
全 年四月二十日出版 (定價金貳拾錢)

奈良縣平民

發行兼 著作者 川畑 楯三郎

大阪府東區系屋町二丁目 百五番屋敷

大阪東區伏見町二丁目 十九番地内外新報社主

印刷者 青山大太郎

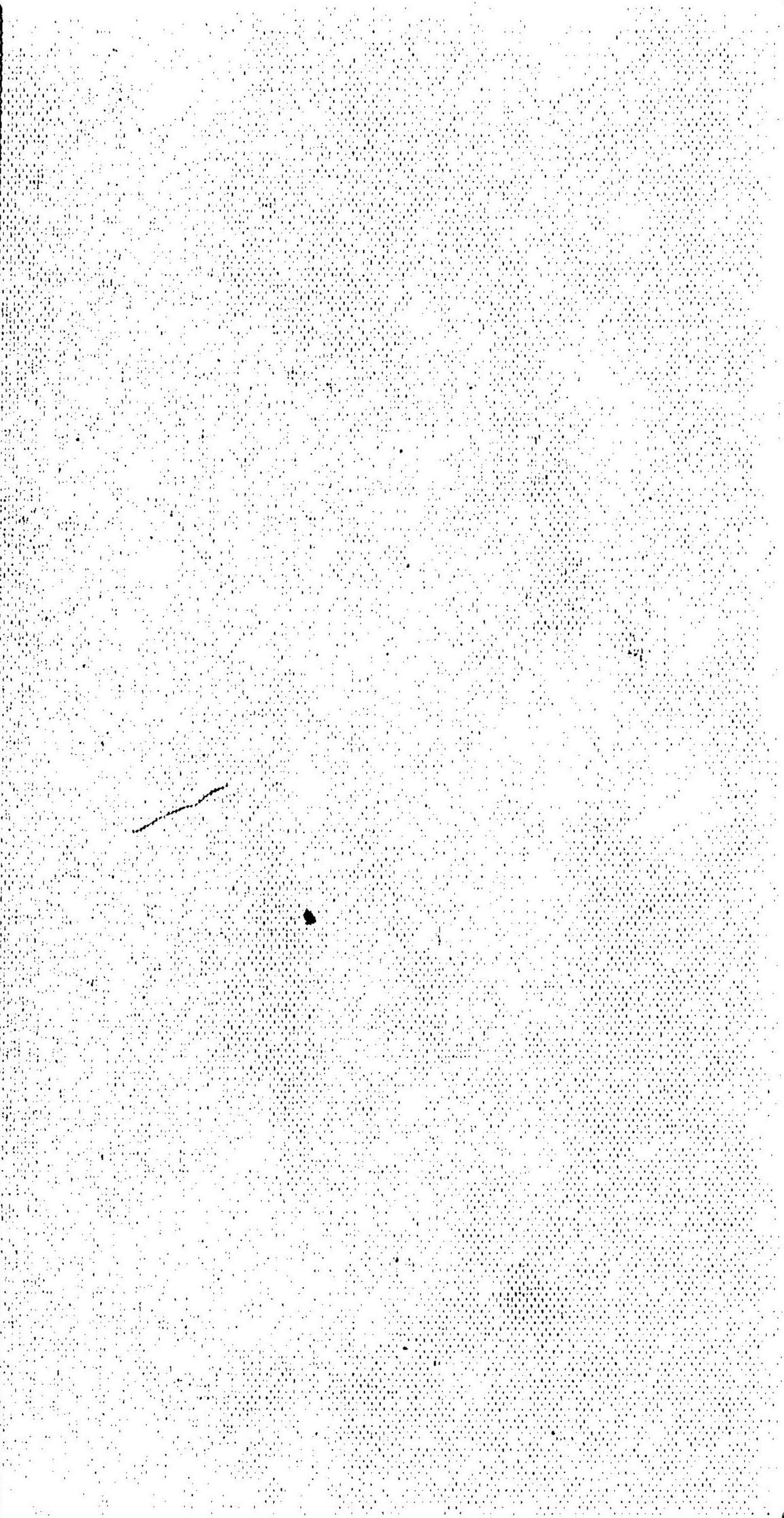
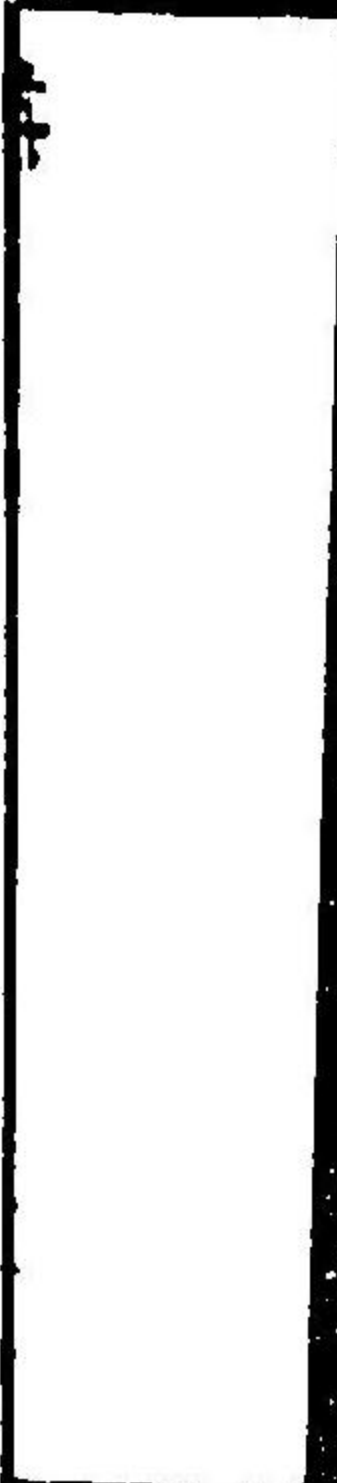
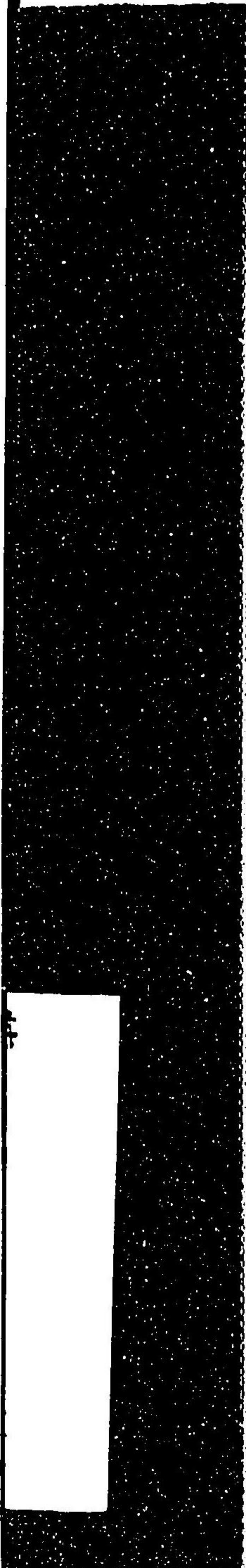
大阪東區松屋町筋系屋町南入

發兌所 みむろ屋書舖





A vertical line of text, possibly a page number or a reference, running down the right side of the page. The text is extremely faint and illegible.



特 22

653

松菊
余芳 凌霜談

国立国会図書館

091550-000-3

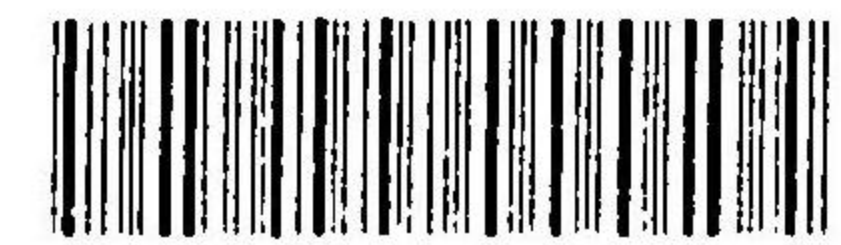
特 22-653

凌霜談

潜竜外史 / 著

M 2 2

DBN-2543



12

